

2019年7月7日（日）「主に会う準備はいいですか」

マタイ 24:32-35

32 いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。33 そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。34 まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。35 この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。

【序論】

24章に入ってから長らく、「世の終わり」についての主イエスの教えを学んでおります。ところで、「再臨」という事柄に対して私たちはどんなイメージをもっているでしょうか。救いの日であるか、審きの日であるか。もしその日が今日訪れたとしたら、私たちはどういう反応をするのだろうか。私は育った環境的に、幼少の頃から世の終わり、あるいは自分の人生の終わりについて考えることが多かったのですが、自分の永遠の行き先が決定される日でありますから、やはり穏やかならぬ心境にならざるを得ませんでした。今は福音を知り、依り頼むべき方があるとはいえ、主の再臨が自分にとって救いとなるか、審きとなるかは、やはりその時を迎えてみなければ分かりません。自分自身には救いを保証するものは何もなく、ただ主の救いの約束のことばを信じているだけです。そう考えると、自分とは何という心許ない存在なのかと思わずにはおられなくなる。それが自分に対して持っている意識です。そんな私にとって、またすべてのキリスト者にとって、今日の主の御言葉はどのように響いてくるのでしょうか。

【本論】

本論 1. いちじくの木の特徴

いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。（24:32）

いちじくは日本でも普通に売られている果物であり、比較的馴染みあるものではないでしょうか。とはいえ、その成長の過程を見たことのある人は少ないかも知れません。主イエスがここで特に話題に挙げたのは、他の植物とは違った特徴のゆえです。パレスチ

ナではほとんどの木が常緑樹であり、一年中葉をつけていますが、いちじくだけは冬になると葉を落とすのです。だから、いちじくはすぐにそれと分かる。パレスチナは亜熱帯気候であり、一年は夏の乾燥期と冬の雨期の二季に分かれます。春と秋はないに等しい。植えつけ期は 12～3 月で、収穫期は「夏果（早なり）」（6 月下旬～7 月下旬）と「秋果」（8 月下旬～10 月下旬）の二期に分かれます。いちじくは葉よりも先に花が咲きますが、開花期がいつであるかはよく分かりません。なぜなら、果実（花托^{かたく}）の内部に無数の花がつき、外からは見えないからです。だから「無花果」という漢字が充てられました。葉が出る頃には、早なりの実を刈り入れる時期に差し掛かっていますから、葉の出現によって夏の近いことが分かるのです。「枝が柔らかくなる」とは、樹液が上がってきたときに起きる変化のことでしょう。



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
収穫期												
植え替え												
肥料（鉢植え）												
肥料（庭植え）												
剪定												

(https://www.shuminoengei.jp/m-pc/a-page_p_detail/target_plant_code-109)

主イエスはこのいちじくの特徴になぞらえ、再臨の前にはそれと分かる変化が世に現れることを言おうとしておられる。それは、31 節までに語られてきたすべての預言を指します。ここで、もう一度その内容をまとめてみましょう。

- ①偽キリスト、偽預言者の出現（5 節、24 節）
- ②戦争の噂（6 節）
- ③飢饉、地震（7 節）
- ④為政者によるキリスト者の迫害（9 節）
- ⑤教会内における秩序の崩壊（10 節、12 節）
- ⑥福音の世界的拡大（14 節）
- ⑦「荒らす憎むべき者」の台頭（15 節）
- ⑧宇宙規模の天変地異（29 節）

これら一連の出来事が再臨に先立って起きてくる。まるで、いちじくの木に葉が繁り、収穫の時期を迎えるように。収穫は栽培者にとって最高の喜びの瞬間です。つまり、再臨はある人にとっては収穫の喜びの時となる。救いの完成という収穫であります。

本論 2. 人の子の来臨の間近さ

そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。(24:33)

この主のことばを聞いていた弟子たちは、切迫感と期待とをもって理解したに違いありません。これから時代はいよいよ悪くなる。自分たちにも災いが降りかかるだろう。しかし、その後には栄光の主の来臨があるのだ。それまでの時を耐え忍ぼうではないかと。

「人の子が戸口まで近づいている」という表現には、信者一人一人の霊の眼を醒まさせようという迫りがあります。それと同時に、まだ眠りこけている世界の眼を醒まさせようともしている。主イエスを迎える用意はできているか。あなたはそのまま人生を終えて、聖なる神の御前に立つことができるか。キリストの義を身に纏っているか。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。(黙示録 3:20)

もう天に召されたゴスペルシンガーで井澤豊さんという方がおられましたが、彼はかつてTN教会にご家族で出席してくださっていました。ご夫婦で音楽活動をしておられ、そのデュエットに子どもながら感動したものです。ご主人は後に牧師になりましたが、2004 年5月に突然の交通事故で天に召されました。奥様が作詞作曲された曲で「もしもキリストが来られたら」という主の再臨をテーマにした歌があります。

もしも、今、キリストがこの地上に戻って来られたら
心の用意はできていますか、主に会う準備はいいですか
天の雲に乗り、輝く栄光、あらわしながらやってくるから
心の用意はできていますか、主に会う準備はいいですか

もしも、今、キリストがこの地上に戻って来られたら
心の用意はできていますか、主に会う準備はいいですか
御使いたちは全ての人を、神の御前に集めるから
心の用意はできていますか、主に会う準備はいいですか

もしも、今、キリストがこの地上に戻って来られたら
心の用意はできていますか、主に会う準備はいいですか
その日、その時は盗人のように、誰にも分からずやって来るから
心の用意はできていますか、主に会う準備はいいですか

この歌を聞いた当時、私はまだ小学生でしたが、自分は今のまま死んで果たして主に会うことができるだろうかと、真剣に考えたものです。しかし、そのために何をすればよいか分かりませんでした。もしあの頃の自分に会えるなら、「イエス様は君の心の扉を叩いているんだよ。ためらわずお迎えしてごらん」と言ってあげることでしょう。今はこういう立場になって、多くの人に宣べ伝えられる幸いを噛み締めております。

本論 3. 主の御言葉の確実性

まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。(24:34)

主イエスの再臨がいつ訪れるか、それは誰にも分からない(24:36)。信者は「既に」と「未だ」の界を生きているのです。終末の時代は既に訪れている。しかし、未だ最後の日は来ていない。過ぎ去るべき「この時代」という言葉には曖昧さがあり、広い解釈の可能性があります。旧約聖書の光に照らして見るならば、詩篇で詩人が神の守りを求めて「あなたはこの時代からとしえまでも彼らを保たれます」(詩篇 12:7)と謳っている言葉と重なってくるでしょう。これは「悪い時代」からの守りを表しています。同様に、預言者エレミヤも「主は、この世代の者を、激しく怒って、退け、捨てた」(エレミヤ 7:29)と語り、「悪い時代」を表現しています。また、主イエスが「荒らす憎むべき者」が現れるということを言っておられるように、神殿を冒瀆したアンティオコス・エピファネスや、ローマ帝国によるエルサレム神殿破壊、その後の歴史においても度々現れる世界的な破壊者を暗示する言葉とも取ることができます。いずれにせよ、一連の歴史的事件が起きた後に主は来られることになる。

この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。

(24:35)

私たちは、この世界に「不変」のものが存在しないということを日々目の当たりにしているでしょう。この世は目まぐるしく変化しており、地球上のあらゆるものに危機が及んできています。近年頻発するようになった豪雨、巨大な台風、大地震、環境の著しい変化、人間を含む動植物の生態系の崩れ…。あらゆるものが移り変わっていく中であって、主はただ一つ変わることものないものをここに呈示される。それは、ご自身の御言葉であると。これから世の中がどのように変わっていくか、その過程を示し、最終的にご自分の再臨によって世が終わりを迎えるということを普遍的真理として示される。このことばを信じるか否かは、聖書読者一人一人の信仰に関わる領域であります。

【結論】

今日の箇所が私たちに明確に語りかけていることがあるでしょう。それは、いつ如何なる時にも再臨の主を迎える用意をして生きていなさいということです。私たちは目を醒ましていなくてはなりません。第一世紀のキリスト者にとって、主の再臨は非常に切迫した事柄でした。明日にでもその日が来るのではないかという期待と緊張とをもって彼らは生き、そして死んでいきました。主は、彼らが生きている間に再臨があるとは断言されませんでした、その可能性がないとも言いませんでした。その後のすべての聖書読者にも同様のメッセージが語られています。私たちも、自分が生きている「この時代」に主が来られるかも知れないという備えをして生きていなくてはなりません。では、再臨に備えて生きるとは、具体的にどういう生き方であるか。最後に二つのことをお伝えしたいと思います。

第一に、霊の目を醒まし続けているということ。与えられた日々を主と共に生き、主と共に終えていく。一日の終わりを人生の終わりのように、「この時代」の最後の日のように終えていくということです。

第二に、自分に与えられた務めを忠実に果たし続けるということ。脇目もふらず、自分の使命に邁進する。懸命にこの世を生きる。その働きは主のために献げられるべきものです。神の支配がこの世に前進するために、私たちは召されたのです。

【祈り】

心の用意はできていますか、主に会う準備はいいですか

主よ、このように歌った人がいました。私たちの心にダイレクトに問いかける言葉です。私たちの霊の目を醒まさせ、与えられた務めに忠実に歩ませ、いついかなる時に再臨の主が来られてもよいように生きさせてください。それは思いがけない時に来ると言われています。それと同時に、前兆となるものもあると。移りゆく世をよく見つめ、今何が起きているかを悟らせてください。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、

終わりの日の兆しを、様々な事象をとおして、民に示し給う、父なる神の愛。

聖徒の霊の目を醒まさせ、ご自身の来臨に備えさせ給う、主イエス・キリストの恵み。

この世で与えられた務めを忠実に果たし、平安のうちに日々の終わりを迎えさせ給う、

聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。